

## ■電 力

日本最初の電燈会社として東京電燈が設立許可をうけたのは、明治十六年のことである。以後の電力業の発展過程は、大きく次の四つの時期に分けることができる。①第一次大戦までの成長期、②戦間期の五大電力の時代、③昭和十四～二十五年の電力国家管理の時代、④昭和二十六年の電力再編成以降。各時期の代表的な社史には以下のものがある。

まず『東京電燈株式会社開業五十年史』（昭和十一年）。記述がとくにすぐれているわけではないが、電力業の初期の歴史は、同時に東京電燈の歴史であったと言っても過言ではないので、ここに掲げた。設立の経過と当初の経営上の苦難、発電コストを低減し動力革命を促進して日本の電力業発展の画期となった駒橋水力発電所の建設、「三電競争」から「三電協定」にいたる経緯等の叙述が興味深い。なお、第一次大戦以前の時期について比較的詳しく記述している社史には、『大阪電燈株式会社沿革史』（大正十四年）と『京都電燈株式会社五十年史』（昭和十四年）がある。

五大電力の社史の中で最も時間をかけて編集され、最も充実しているのが『東邦電力史』（昭和三十七年）である。東邦電力の第二代社長松永安左エ門は、周知のように「電力の鬼」と呼ばれ、電力国家管理に断固として抵抗し、戦後の電力再編成に指導的役割をはたした。本書では、超電力連系の研究、水火併用方式にもとづく電源開発、業界制覇をめざした東京進出、一連のユニークな方法による資金調達、電力業界の自主的統制の推進、電力国家管理に対する反対運動等、松永の経営理念と行動が詳細に記述されている。このは

か『日本電力株式会社十年史』（昭和八年）、『大同電力株式会社沿革史』（昭和十六年）、『宇治電之回顧』（宇治川電気、昭和十七年）をあげておこう。

電力国家管理時代の歴史としては、『日本発送電社史総合編』（昭和二十九年）、同『技術編』（同）、同『業務編』（昭和三十年）がある。『総合編』は、電力国家管理の担い手であった日本発送電の動向を、昭和十四年の設立から二十六年の解散にいたる一〇年余の期間について概括的に記述している。『技術編』は、事業の概要、計画、送電系統の整備、建設、運用維持、戦時施策並に各種の災害、電力供給、技術の研究と指導の八章からなる。『業務編』は、総務、経理、業務（フル計算、力率制、豊水期電力利用強化等）、資材、企画と調査、労務、電気事業の再編成、清算の八章からなる。なお、配電部門の統制として全国九ブロックに配電会社がつくられた。それらのうち社史は『中部配電社史』（昭和二十九年）、『北陸配電社史』（昭和三十一年）、『関西配電社史』（昭和二十八年）、『中国配電株式会社十年史』（昭和二十八年）、『四国配電十年史』（昭和二十八年）、『九州配電株式会社十年史』（昭和二十七年）がある。

戦後の電力会社の社史は、総じて大部であり記述も戦前のものより充実している。ただし、各社ともほぼ一〇年毎に刊行しているという事情もあって、事実の羅列といった印象が強く、必ずしも歴史的叙述に成功していない。その中で、『関西電力二十五年度史』は、既刊の『十年』や『二十年』にとらわれずに、創立前史にまでたしかかえて「経営史的観点」を重視した記述を行なっている。『東京電力三十年史』（昭和五十八年）は同社の最初の社史で、創立前史にまでさかのぼった重厚な内容である。また、『中部電力三十年史』（昭和五十六年）、『九州電力三十年史』（昭和五十七年）はともに最近の一〇年間の記述に重点をおいており、電源開発の『電発三十年史』（昭和五十九年）は、さきの一〇年史が大判のビジュアルな社史であったことから、あらためて通史として書きおこしている。写真やイラスト、コラムをそう入し、読みやすさの工夫がなされ

ている。

以上各時期の代表的な社史を列挙したが、このほかに、戦前戦後を通じた地方電気事業史である『東北地方電気事業史』（昭和三十五年）と『中国地方電気事業史』（昭和四十九年）に注目したい。前者は東北電力の一〇年史を、後者は中国電力の二〇年史を、それぞれ兼ねている。両者とも一〇〇〇ページ内外の大部の事業史であり、従来経営の実態がほとんど明らかにされていなかった戦前の中小電力について、意欲的に叙述している点に特徴がある。例えば『東北地方電気事業史』は、青森県二二、岩手県二九、秋田県三三、宮城県三三、山形県二二、福島県六九、新潟県四六、七県合計で二五四の中小電気事業者を取り上げている。また、『中国地方電気事業史』の鳥取電灯、出雲電気、山陽中央水電、中国合同電気、山口県営電気事業等に関する記述も貴重である。

## ■ガ ス

日本のガス事業は、明治五年に高島嘉右衛門が外国人技師を招いて、横浜の馬車道に十数基のガス灯を点灯したことに始まる。最初の民間ガス会社である東京瓦斯が設立されたのは明治十八年のことであり、以後明治三十年代にかけて、大阪瓦斯・神戸瓦斯・長崎瓦斯・博多瓦斯・名古屋瓦斯など、主要都市の有力なガス会社が次々と設立された。

第二次世界大戦期には戦時統制の一環として、全国を八ブロックに分けてガス会社の統合政策を展開、戦災により大きな打撃を受けたが、昭和二十九年にガス事業法が施行されたころから再び発展の道をあゆみ始

めた。

東京瓦斯には『東京瓦斯株式会社沿革及事業略史』（昭和二年）、『東京瓦斯五十年史』（昭和十年）、『東京瓦斯七十年史』（昭和三十一年）、『東京瓦斯九十年史』（昭和五十一年）などがある。『五十年史』は、日本のガス会社の本格的社史としては最も古いものである。明治十八年の会社設立から昭和十年までの五十年間を、「創業時代」「受難時代」「復興時代」に分け、全体的には印象が薄いが、個別的には会社創設の事情、関東大震災の被害とその復旧、社内の方務管理など興味深い論点も含まれている。

大阪瓦斯には『大阪瓦斯五十年史』（昭和三十年）、『大阪ガス最近の十年』（昭和四十一年）がある。

大阪瓦斯は明治二十九年設立、アメリカ資本との合併で三十八年に開業した特色ある歴史をもつ。『五十年史』ではこの設立の事情、電燈会社との競争のための顧客へのサービスなどが興味深く書かれている。また、第二次世界大戦末期に合併した神戸瓦斯以下一四社の略史沿革もつけている。神戸瓦斯には『神戸瓦斯四十年史』（昭和十五年）があり、『東京瓦斯五十年史』におとらぬ充実した内容をもっている。

『最近の十年』は、『五十年史』の続刊で、主として昭和三十年代の動向を取り扱い、エネルギー革新や技術革新、高度成長下の地域社会の変容などの経済社会構造の変化の流れの中で描き出している。

東邦瓦斯には『社史』（昭和三十二年）、『東邦瓦斯五十年史』（昭和四十七年）、『東邦瓦斯最近十年の歩み』（昭和五十八年）がある。

『五十年史』は、同社の通史として新たに書きおろされた。前史では明治三十九年から大正十一年までの名古屋瓦斯時代が、本史では大正十一年以降の東邦瓦斯時代が、それぞれ叙述されている。

以上は大都市のガス会社であるが、地方のガス会社の社史にも力のこもったものが多い。

刊行順にあげると、まず『四国瓦斯株式会社五十年史』（昭和三十七年）で、地方のガス会社史の先駆的

な役割をはたした。四国ガス式オイルガス発生装置などの発明に関する記述が多い点に特徴がある。

『社史・中部瓦斯株式会社』（昭和五十一年）は、実証的資料にもとづく編纂方針が最も良く堅持された力作である。これは、監修者である入交好脩いりまこうしゅう氏が、中部瓦斯発展の功労者である神野三郎の伝記編纂を事前  
に手がけていたことによるものであろう。随所に一次資料を駆使していることが、本書の価値を高めている。  
『五十年の歩み（関東天然瓦斯開発株式会社・大多喜天然瓦斯株式会社）』（昭和五十六年）は、千葉県に  
おける天然ガスの開発、事業化を取り扱ったユニークな社史である。関東天然瓦斯開発と大多喜天然瓦斯は  
もともと同一の会社から出発しており、前者が天然ガスの開発と採取ガスの卸売事業、後者が都市ガス事業  
というように、両社のあいだには密接な分業関係が成立している。巻末の年譜が詳細である点に特徴がある。  
『西部瓦斯株式会社社史』（昭和五十七年）は、最近刊の本格的社史。前史部分が充実しており、九州地方  
におけるガス事業の展開を明治期まで立ち返って叙述している。口絵や写真が豊富で、別冊の資料編も利用  
しやすい。